

# 闘 争 論 の 一 考 察

月 光 恵 雲

## (1)

古代ギリシャのヘラクリタスは「闘争は社会の正義であり、全ての物の父である」と述べて以来、闘争とは何かが問題となっている。マキャヴェリーの思想の中心ともなったポリビアスの考え方は次の如くである。

人間の弱者は自から守る為に社会を作り、その統卒者は最強である。これを王と呼び、王政は正当であり、平和を保つことが王者の義務であり、責任であるが、王者はその義務を忘れることは不正であり、暴君である。それを正すものは貴族である。又それを支持するものは人民である。王政、貴族政治、民主政治と循環するものであると。

又14世紀のアラビアのカルダンの思想はグンプロビッツやフランツ、オペンハイマーによって取り上げられることによって脚光を浴びるに至った。彼は次のように述べている。

他人の攻撃や圧迫から身を守る為に人間相互を引き離す抑制力が必要である。それは武器ではなく、国家主権である。然も人間には欠くことが出来なく、その現象の最も重要なものは人間の連帯性である。闘争によってのみ国家の連帯性が強められる力が支配者の手に集中されることによって連帯性が弱まり、支配者への攻撃が強まると。

然し此の考え方は余り西欧諸国に影響を及ぼさなかった。西欧諸国に強い影響力を持った人はマキャヴェリーである。彼の著書「君主論」(Prince)は政治学では重要なものとなっている。その中に次のような考え方が述べられている。

人間の性質は悪である。機会あるごとに悪の性質を示めそうとしている。征服欲は絶えず人間の心に働いている。貧困と飢えだけが人間を勤勉にしている。人間は自己防衛の為に強者を選び強者に従う事を約束する。そこで始めて人間は善と勇気を知る。君主は非選択であり、弱者の保護者である。君主は贅沢となり、民衆の嫉妬を招く。遂に民主政治となり、無政府状態になり、新しく独裁者を求めるようになると述べ、彼は力の均衡を求めた点ではポリビアスと同じである。

最も近代政治学に影響を及ぼしたものはフランスのジャン・ボデンである。彼は16世紀のフランス政治社会学者であり、次のように考えていた。

市民社会は国家に先行し、優者と劣者の関係であり、征服者と被征服者の関係である。

社会構造は闘争が役割を演じている解体と再組織の現象過程の中にある、闘争のない社会は戦う気力のない農民のようなものである。

資源の欠乏は闘争への厳しい試練である。国家主権は制裁力があって始めて慣習法を有効にする。その主権は法をつくる無限の権威を持っている。その権威の所在の移動を革命と考えた。

此のボデインの継承者がホップスである。彼の「市民社会」(De Cive) 又は「大権勢家」(Levia-

than) を著述したのはボデインが彼の60年前に直面したと同じ事件に出会った。彼の著述はパリ一逃亡生活の中で行われた。ホップスは次のように述べた。

人間と自然との唯物的概念を認め、知識の経験的概念を受け入れた。動物の本質は二種の運動の中に発見される。すなわち活力と意志力である。意志は食欲又は欲望として何かに向けられる。又その反対でもある。感情はすべてこれに帰属する。此の基礎で社会の性質や国の問題を討究する。人間行為の主因は次の事である。人間は絶えず権力を求め、死ぬまで終わらない。これは2つの方法で働く。すなわち王は最も大きな権力を持ち、国内的には法によってそれを保証する。国外では戦争によって確保する。それがなされた時に、新しい欲望を生ずる。他面において安楽と感覚的快樂を欲するため人は共通の権力に従うことを望む。かような欲望によって、人自身の労働や勤勉からその代償として望まれる保護を捨てる。闘争の主たる形は同一の食欲を満足するための競争の中にある。権力や賛美と認識を望むことで他人より優れていないことを恐れる。個人の自然の関係は相互の競争であり、不信であり、威信を求める努力である。自然の状態の人間は戦争状態であり、自然の状態では善悪の区別がない。自然の権利は人の存在を守ることしか意味しない。国家は自己保存欲求に始まる。自然の戦争状態を逃れることが国家をつくる。それ故に国民の不従順な行為の理由にかかわらず不正である。主権も又、国民の契約を違反する理由をつくることは出来ない。主権は国民間の争いを判定する権力を持ち、戦争や平和を宣言し、財産、名誉、権利を分配する権威である。無政府状態では国民を守ることも出来ないし、国民の主権への義務もない。又道徳や正義は国家の創造物である。これらの理性的なものから経験的なものへの闘争論の移行はヒュムによって始められた。ヒュムはモンテスキューと親しくなり、ルソーを英国に連れて来たが、間もなく不和になった。彼は次のような見解を有していた。

権利は権力への権利と財産権である。人は党派に属する時には恥じるどころなく党につかえる為に道徳や名誉を無視しがちである。権利を与えられた党派程頑固なものはない。財産権の見解はすべての政府の基礎である。政府は公益、財産権、権力権の3つの見解の下につくられる。又少数の多数に対する権威がつくられる。これらに力を加え、判断し、限定し、それらの運営を私利私欲、恐怖、愛情に変える。すなわち力と与論が含まれるところの複雑な方程式の一種としての政府についてヒュムが述べている。その変遷は国家の批判現象として力にもとづく合法的権力の概念がヒュムによってつくられた。政府の起源は常識的、経験的に処理された。人間は必要性から、自然の性向から、又は習慣から社会を維持しなければならない。首領が思慮分別と勇気と同様に公正さを有していたら、平和の時には種々の相異の調停者であり、漸次彼の権威を確立することが出来るであろう。力、自由、権威の問題は同時に解決されることは出来ない。ヒュムは力と同意の結合が社会構造の中で働いていると主張した。人間は教育が行われるまでは肉体力、精神力、才能はほぼ同じであったので、自分自身の同意だけが人間を社会化し、権威に従わせることが出来たことを認めねばならぬ。

このヒュムの見解と共に彼の友人のアダム・ファガソンの見解がある。

彼はモンテスキューと共に、外部的、無意志的要素が社会成長を決定する。すなわち哲学者の

思考よりむしろ自然要因が国家を決定すると信じた。又ヒュムやボデインと共に彼は人間は孤独で生きていなくて、集団で生活していたと信じたので、人間社会の闘争は進歩に必要な付随物であり、有用であると信じた。国家間の競争や戦争がなかったら、市民社会は目的や形を見つけだすことが出来なかったであろう。実際に苦闘しなければ、我々は仲間を理解することが出来ないであろう。闘争の種々の形は政治と同様に経済競争の中にあらわれる。すなわちそれらは戦争や国際関係の中にあらわれる。

経済的繁栄は政治的、軍事的闘争の中で見出される。人間の生産物に作用する本能や習慣は社会の形を作り出す。自然権は人自身の才能を使用する人権である。人間の努力によって価値を確保することは社会の権威と秩序を生ずる。けれどもファガソンは「平和は社会の目標である」か疑っている。

18世紀末にヒュムやファガソンと同じくフランスではモンテスキューの影響の下にあったタァゴットが同じ見解を発展した。タァゴットは人間への影響力の複数性の概念を発展した。彼は人間の心は常に同じであると仮定した。此の事は社会的、歴史的比較証明の社会科学の価値を中心点とすることに気づかせた。その事が地上の野蛮と文化の多様性を見出させ、心と社会の法則を示すのにそれらを用いられた。それ故に文化の発達につれて、教育の役割が益々重要性を増した。けれども戦争や闘争が固定している習慣を解体するのに有効でなければ、人類は平凡であったであろう。闘争すなわち偉大な文化の解体者はすべての真の進歩の根源である。

これらの早期闘争理論は社会学の新しい学派に豊富な資料を提供し、闘争論の社会学的妥当性の証明を与えるものである。

闘争論の史的形態は単なる史的好奇心ではない。それらは伝統の発達を示すものである。例えばポリビァスはギリシャの世界に於ける闘争の種々を示すものである。ローマ人はエピキュリアンの伝統、特にポリビァンの見解に精通していた。それがマキヤベリを通して17世紀、18世紀の闘争論に引き継がれた事は注目に価するものである。17世紀、18世紀には政治科学の中に定着した。けれども18世紀では闘争論の中心課題は経済現象の説明に適用されるようになったのである。その中で著名な学者はアダム・スミスとマルサスである。

アダム・スミスは彼の名著「国富論」の中で経済に於ける競争は自由でなければならぬ。此の方法でのみ最高の生産性が完成されることが出来ると述べ「政府の領域はそれ相当に減少されねばならぬ。すなわち自然の力は個人と集団の要求を調停するでしょう。伝統的闘争論は個人と集団の闘争から生ずる緊張を均衡している制度として国家について考える時に国家を分析の中心対象とした。重農主義者にとって人間社会の現象の最も基本的なものは生活必需品を求める努力である。経済競争は生活必需品の生産の効力の大きな動因である」と述べている。又マルサスはあらゆる競争は生き残る為の競争であり、人間が生き、自分自身を再生産するのに十分であるところまで賃銀を降下する。人口増加を抑制しなければあらゆる改良計画は無効であろうと主張している。マルサスの論に反論して産業革命によって達成された生産性の向上をマルサスは過小評価したと言われているが、彼の論は生物学やダウインに強い影響を与えた事は論を待つまでもない

ことである。

此のようにして種々の闘争論は社会の中心事実として認められ、後世の闘争論の基礎となっている。

## (2)

19世紀に於いてイデオロギー的闘争論の3つの主要な主張がある。それはマルクスの社会主義と2つの異った形の社会進化論である。イデオロギーと科学論とに闘争論を区別することは闘争論を理解する上での重要な問題である。一面ではそれらがどのように類似していようとイデオロギーと科学論は基本的に異っている。他面では19世紀の闘争イデオロギーは社会科学が解決されなければならぬ重要な問題を示した。

19世紀の社会主義は18世紀の社会改良と科学方法の特殊結合の真の後継者であったことは実証主義の背景を探ることで観察された。社会学は科学方法を引継いだが、社会改良主義を排除した。実際に保守的答の性格を帯びた。この為に早期社会学にマルクスが影響を及ぼした事を理解することは困難である。マルクス主義又は社会主義を述べるところの社会学者は稀少である。同時に科学原則と社会改良を結合するものとして社会主義を特色づけることはマルキシズムの特殊性を立証するのに不十分である。マルキシズムを区別する前に十分に社会主義を特色づけねばならぬ。人間社会は全ての物を結合する無限の可能性を持つので完全に独断的ではない。一領域で基本的制度の整備は社会生活の他の領域の他の面に影響を及ぼす。

マルクス主義は社会主義闘争イデオロギーであり、然もあらゆる現象が経済に依存するものとした点を現代社会学の注目に価するものである。20世紀にはマルクス主義者が指摘した多くの問題があらわれた。すなわち階級問題、音楽、芸術、文化、知識の問題。経済現象やその他の社会現象の相互関係の問題である。マルクス主義がプロレタリアの名の下に発展させられた闘争イデオロギーを示したが、社会進化論者は現代社会の企業集団の名の下に発展させられた闘争イデオロギーの形態である。マルクス主義は実際に早期社会学に影響しなく、間接的な道筋で遅れて影響したことが重要である。社会進化論は他面に於いて社会学発展の主流に近い。普遍的競争の理念は重農主義者や古典経済学者によって経済生活の基礎とされた。競争の概念はマルサスの人口論的反省の生存の概念に深く入り込んだ。ダーウインの生物学への刺戟の一つを此の考えが形成したと言ってよい。それが逆に生物学から社会学に返されたと言ってもよい。ダーウインは彼自身の理論を人に適用することを準備した。かような延長線上にマルサスの人口論がダーウインの考えの背景にあるように思われる。生物は生き残ることを競争している。ダーウインは適者生存を主張した。この事は人にとって真実である。人の早期の先祖は他の生物のように生命維持の手段以上に増加しがちであった。人は生命維持の努力をなさねばならぬ。その結果が厳しい自然淘汰の法則である。あらゆる種類の有益な変化が保存され、有害な物が取り除かれるであろう。人が存在するところの最も粗末な状態で此の世にあらわれた最も優性な動物である。

それゆえに地上に広くひろがった、人間の優性は人間の知的能力のためである。自然淘汰の法

則や適者生存は人間に知能を与えた。連帯責任の倫理を持つ集団は生存価値を増加した。すなわち相互に危険を警告し合い相互に防禦し、他のものを征服し、他のものより永く生存するために競争するのである。その適者生存の説から貧困者や病人を防ぐことを社会進化論者は主張した。ダーウィンに近い論者として有名なスペンサーやサムナーが数えられる。此等の人々と異った社会進化論者の中にゴビノーやラブーゲーが数えられる。

### (3)

社会学的闘争論はマルキシズムや社会進化論者の命題と一致しているものはあるけれども、社会学の科学基準にもとづいた仮説を用いる点では科学的である。社会学者が19世紀後半に闘争論に目を向け始めた時に、実証主義的有機体説のもととなるところのイデオロギー的雰囲気は保守主義と科学的方法の結合を求めた。その両方の要求したけれども、実証主義的有機体説は確固とした結果を生じなかった。それは社会の保守的社会像又は信頼出来る方法の要求を満足することは出来なかった。実証主義的有機体説は結局不適當であることが認められたけれども、科学方法の要求と社会の保守的像の要求が残っていた。闘争論は両方の要求を満足させることが出来た。

社会学的闘争論は全体として有機体論というより寧ろ実証主義である。闘争論者は経験的事実の全体に目をとじねばならなかったことも事実である。マルキシズムや社会進化論によって示めされた如く、闘争論を攻撃イデオロギーに発展することは可能であるが、それは決して必要ではない。現在の社会の正常な機能は調和、安定、均衡、闘争の終結と呼ばれるところのものに向っての一定の運動として見られることが出来る。それゆえに時には誤っているように思われるけれども、物事を悪化したり、世界を改革したり、社会の正常な進行を妨げたりしなくて、世界の平和を維持することが保守的知識である。現実的な方法で実証主義的有機体説を正すことでイデオロギー的要求に適合したので社会学理論の第二の形として闘争社会学があらわれた。進化論の範囲内で伝統的闘争論の再現が、ベジホットの著書によって示された。彼の著書「物理学と政治学」が闘争論として重要である。その本の副題に「自然淘汰の適用と政治社会への継承についての考究」とつけられているように生物学的考えと政治学的考えの融合にもとづく社会理論である。彼はヘンリ・サムナーの古代法に精しく、社会の原始状態についてサムナーの考えを受け入れていた。彼は進化論をも受け入れていたので人間社会の発展に自然淘汰が大きな役割をなしていると確信していた。ベジホットにとって現代の特色は急速な変化であると考え、すべてのものが更新されると考えた。科学の機能はすべての物を過去の物に変え、絶えず思想は動きつづける。此が無反省な習慣にもとづく安定によって特色づけられている過去の時代と対立するところのものである。家長権家族によって社会が作られ、それが国家の起源である。サムナーは政治社会の起源は組織の法則として家長権家族から地域接触に移行したところに生じたと考えたが、ベジホットはそれは皮相的であってダーウィンの自然淘汰の原則がもっと妥当していると考えた。政治が一度始められた時に、それが継続する理由を説明することは容易なことである。自然淘汰の原則に他面に於いて反対されたとしても、人間の早期歴史に於いては支配的であったことは疑う

余地がない。早期政治社会に於ける基本的問題は命令と服従を完成することであった。これは教会と国家との融合に於いて完成された。このような融合は習慣を作ることであった。生活の全すべての行動は一つの目的の為に一つの規則に従うことであった。すなわち科学が我々に教えるところの訓練である。訓練又は規律はあらゆる社会の一要素である。人は好むところのものを選ぶと知っているけれども、実際に選ぶべきものと定められた意見によって支配されている。社会秩序の限界内で訓練の過程や習慣の強化が国民性を作る。機会の支配が一つの型を作る。人の眼前にある強者の模倣が一つの型の人を作る。これが国民性を作る一過程である。ベジホットは習慣的行為とそれと闘争する妨害要素との間の緊張として社会力学を考えた。此の主張から社会発展とその構造の中の中心的現象として闘争を指摘した。ベジホットは闘争の意味を発展する時に軍事技術の進歩が最も重要である。人類の戦闘能力は益々大きくなる。軍事力が増すにつれて軍事悪は減少する。国家間の闘争は国家の改良の主要な力であるとまで極言している。ベジホットは人間の歴史を3時代に分類している。1.習慣時代 2.戦争と国家形成の時代 3.論争又は科学の時代、とである。人間社会は訓練によって維持されることを強く主張している。

19世紀末から20世紀初めまで闘争論の最も有力な学者はルデヒ・グンプロビッツである。彼は社会学を次のように定義づけている。

社会学は普遍法則の社会現象への適用、社会に於いてそれらによって作られた特殊な結果を指摘し、最後に特有の社会法則を公式化することにある。

社会現象は集団の作用と人間の集合体にある。社会学は基本的には集団と集団の相互関係の研究である。集団の行動は秩序正しい。社会集団はその現実の社会条件を持続し、適切な社会原因がなければ他に移行しない。換言すれば集団の社会的条件の変化は常に十分な社会原因がなければならぬ。かような十分な社会理由は他の社会集団の影響にもとづくものである。集団相互関係の原因と結果は社会現象と社会過程を構成する。各集団は他の集団の作用の中に入る時、すなわち2つ以上の異った集団が接触する時に、社会過程は常に続いて起る。社会法則はかような過程に関係がある。すべての社会法則は共通の1つの特色を持っている。それらは物の生成を説明するが、決して物の起源を説明しない。集団の起源の問題は社会学の領域外にある。社会生活の説明の中で個人と集団との対立とすべての個人が支配力の活動の中心であるという仮説は偽りの手がかりである。事実として個人が考えるところのものは子供の時代から個人が従っていたところの支配力の生産物である。個人は周囲の社会から支配力の光線を受け入れ、一定の法則に従ってそれらを伝達するところの分光器である。集団の中の個人の行動の中に個人は羊のような性格を持っている。グンプロビッツは社会学が社会起源の問題にかかわることを付けたばかりでなく、個人は合理主義的な個人主義の仮定に基礎をおいた社会理論をも付けた。グンプロビッツの見解は全くベジホットの見解に従っていた。彼は人間性の進歩のすべての理論を疑っていた。習慣的行為のベジホットの強調は彼を煽動の反対の原則に導いたと同様に集団の中の個人の羊のような性格のグンプロビッツの理論は種々の集団の闘争を必要とする。彼は次のように述べている。

人は一単位と考えられるときに、力に対立する行為に必要条件が欠けている。昔から1人でいる

人は考えられない。人は多くの人種的要素を持っている。始めに異った無数の人種的要素があるという仮説で社会学研究が始められた。多元の仮説が確立されることに私は満足を感じる。多元的仮説は人類の複数起源であると「人種闘争」の中で長く論ぜられた。そうしてダーウィンニズムと調和を企てられた。集団内での個人の性向は羊のように群をなしてぐるぐる回ることである。簡単な状況の中で人々は群をなして生活したにちがいない。簡単な動物衝動にたよっているところの人々の集団の生活状況や社会構成は社会変化を示さない。性的満足は男女の差別がない。生物学的起源は此のように認められる事が出来なかったので、子供は母の財産であった。男女の差別のない群の中で妻を盗むことはなかったろう。男は彼自身の為に女を欲したなら、他の集団から盗んだであろう。此の方法で掠奪結婚と族外結婚は父系家族と共にあらわれた。男の主権が確立されたので女系家族の廃止が避けられなかった。これらの制度は集団間の闘争で始まった。掠奪は種族間の敵意を生ずる機会であった。しかも財産の掠奪が誘因であったにちがいない。異常な掠奪の単純な形が最初に起ったにちがいないが、後には外国の集団の征服、土地を奪う遠征の形が後に現われた。土地の所有の最初の形は共同使用の為の土地であったにちがいない。動産は征服で生じたにちがいない。すなわち被征服集団の労働力の使用は自分の労働力で生産しなくてもよかった。その結果あらわれたのは国家である。国家は自然法に従う社会現象であった。1つの集団が他の集団を征服し、主権のある少数者が統御することが国家の始まりである。主権階級は国民階級の強制的黙従を求めた。国家は正義を実現する為に、共通の幸福を確保するための集団ではなかった。秩序が一度確立されたときには、融合過程は漸次に起きる。結局は文明社会では国民の権利は拡大され、国民の利益を守られるようになった。階級序列の創造はとどまることなく多数の階級分化を生じた事は歴史的事実であると認められている。権利は国家以外の何処に存在しなくて、それは政治主権の一分子である。不可侵の人権の概念は国家の存在の基礎の誤った概念と同様に生命の価値の過大評価と人の不当な自己神格化にもとづくものである。此の空想的な自由と平等は国家と両立出来ず、国家の直接的否定である。然し人間の唯一の選択は奴隷いであり不平等である国家か、無政府か何れかを選ぶことである。

此のように説くグンプロビッの影響を受けた1人はグスタフ・ラツエンホフアであった。彼の社会過程の理論の概要は次の如くである。

1. 人間の保存と繁殖は全ての連合のための基礎である。
2. 自己保存と性の個人の衝動は個人の直面する生活状況によって修正され、それに適応させられる。
3. 人口が自然状態を圧迫する時、個人又は集団は生存のための苦闘を強いられる。
4. 個人の性向は個人が無制限に従う傾向のある命令である。
5. 人は生き、同じ種族の他のものと共に平和に繁殖することを好むけれども、自然の状況への人口圧力が他人に対する絶対的敵意を持たせるようになる。
6. 多くの人々の共通の自己保存の有利さがある。性関心は人々の連合を求めさせる。此のようにして始めの自然集団は性と血縁にもとづく、けれども此の関心を満足さすことへの血縁集団

の成功は人口の増加を認め、食料供給を圧迫する。親族集団は分裂し、文化と人種が異なるようになった。分化された集団の接触は戦いになる。1つのかような集団が他の集団によって征服されることは更に複雑な社会形成になり、親族によるより寧ろ共通の伝統と制度によって結合される。

7. 生物学的関係から生ずる社会構造は簡単であるが、征服から生ずる社会構造は複雑である。
8. 社会過程は既存の他の構造から新しい構造の個別化と既存の構造の社会化のリズムである。
9. 個別化に向っての推進力の分化は個人の数によって限定される。個別化の限界は社会の細分化である。社会化又は若干の個人を集団に編成することは全人類を1つの人類構造に編成する理論上限になる。
10. 分化は表現の自由と生来の関心事の満足を認めて、人を社会拘束から解放する。その反対に社会化は生来の又は後天的関心事を確保するために必要な協力を完成するために人々を拘束する。
11. 社会化と分化の社会過程の為に社会必然性は内面的であり、又外面的である。
12. 人が生命を維持することが出来るのに有効な空間に広く拡がれば拡がるだけ、益々社会変化が大きくなる。かような状況下に於ける組織は形式的、強制的性格を帯びる。更に他の領域に生ずる関心事は政治形体を帯びる。
13. 国家の統制の種類は社会進化の程度に相応するものである。国家形成の初期の段階では統制は独裁的であり、強制的である。時が過ぎると習慣的、平和的統制があらわれる。
14. 闘争は社会構造を固め、権力の集合体を創造する。社会分化の根源としての文化と商業は権力の集合体を解体する。
15. 社会分化は上部関係、対等関係、従属関係の複雑な構造を創造する。
16. 社会構造は複雑になるにつれて、戦争や暴力の機会は減少する。なんとなれば複雑な社会構造内の暴動は多くの利害関係の対立から対立活動を始める。
17. 類似しない社会構造が相互に対立する時何時でも個性の中に隠された潜在的絶対的敵意があらわれる。
18. 伝統にもとづく国家は力にもとづく国家に代る。人の関心事の満足の相異がなくなる傾向がある。

要するに生物学的要求が衝動の基礎である。他の人の出現に対する関心によって特色づけられる。環境によって関心が人を連合させ、連合内で人を分化させる。血縁による種族の群が最初の人間の協力である。けれどもその効力が人を増加させ、人を多数の種族の群に分化させ、集団闘争に群を導く、かくして人々が血縁集団の中に住んでいる限り絶対的敵意の原則は統制される。関心は連合と分散の基礎である。平和と闘争のリズムの範囲の広さを増すことで社会構造を人に作らせるとラツェンホフアは説いている。

此のラツェンホフアは欧州の闘争社会学とアメリカ合衆国のそれとの間の過渡期の人物であった。彼の影響を受けたアメリカ合衆国の社会学者はスモルとサムナーであった。闘争論のアメリカ



カ形態は欧州人より個人主義であった。サムナーは闘争論の個性のある形を発展した。サムナーは意識的に無意識的に集団闘争と個人主義的闘争を調和するように努力した。

又アルビオン、ウットベリ・スモルは早期アメリカにあらわれた最も均衡のとれた闘争理論家であった。スモルは彼の著書の「一般社会学」の中で次のように言っている。社会学はスペンサー、ラツェンホフアの段階を通して発展した。

社会学理論の歴史の中に秀れた2つの概念がある。それは社会構造と社会機能の概念である。此の2概念は社会学体系の中心である。スモルはラツェンホフアの社会学理論の大部分を引き継ぎ、彼の要求に適するのに必要ならば何時でも修正を加えた。社会学体系の中心概念は社会過程である。相互作用として社会は自然によって与えられた状況の背景に対して生ずる。一水準で人間活動は生き残るための一定の仕事に集中される。人間の経済活動によって生産される財貨はあり余る供給ではない。ウェストミンスター寺院やセントポール礼拝堂は死体の山になるであろう。生活は物への調和の問題である。人間の歴史の種々の唯物主義的機械的理論は自然の不可避的働きの中で人間の発展の秘密を見つけ出すことを企てている。それらは全くは誤っていない。それらは一基本的要素の絶対価値を誇張しただけである。自然が社会過程の一の究極条件なら生物学はもう一つの条件である。社会過程の中で起きるものの可能性や必要条件は自然環境と生物学の性質によって定められる。闘争と力の調整としての社会過程は環境と遺伝によって既に確立されている。けれども科学研究の対象として生物学と自然環境はスモルによれば他科学の主題である。力が社会の領域にあらわれるときに研究の対象として社会科学は力の表現、作用、原因を用いる。関心の考えは物理学における原子と同じ目的を社会学の中で持っている。それらは我々人間の全ての行為の起因となる究極の要素である。我々が人間行為の中で跡をたどることの出来る最も簡単な型の運動は関心である。関心の基本的なものを人と同様に動植物も有している。それはあらゆる形の活力に共通している。それは全ての肉体的有機体の特質であり、動植物の特殊な内容である。人の生物学的研究は此の関心以上に進まない。心理学者にとって何かを知る。何かを感じる。何かを意欲することの中心として個人に興味がある。一つの関心は実現されないことに対する不満足量である。そうして示された状況を実現する為の再調整の素因である。人間の関心は社会学において考えられねばならぬ究極の条件である。我々の知る限りでは全生命過程は関心を調整し、発展し、満足する過程である。社会学で対象とされる関心は健康、財産、社交性、知識、美、正しさである。社会学はそれらの過去、現在、未来に関連して観察し、分類し、批判し、測定し、関連づけるための技術である。闘争論の一般的特性は個人の重要性を無視し、又は軽視する傾向がある。ベジホットは多数の個人の羊のような行為から多くの社会安定を推論した。グンプロビッツは彼に賛成したばかりでなく自分自身の主張の一部を加えた。個人は社会力のプリズムであり、集団が考えることを主張した。スモルは個人ばかりでなく連合を考えた。連合で起きるところのものは個人の環境を作り上げる外部の状況の中にある種々の要素に反応する個人の要素の機能である。共通の人間性質の概念の基本的問題の一は此の人間性質と社会を区別する方法である。かような相異を区別する為に、スミルは次の事を挙げている。1. 精神的環境、2. 接触、

3. 分化, 4. 集団, 5. 闘争, 6. 社会情勢である。個人と集団が変化する理由は人が環境に反応することである。空間は自然環境であり, 社会は精神環境である。此の精神環境は習慣, 衝動, 努力, 権力の限界である。社会生活は集団の無限の形成と破壊である。社会過程は集団関心の動と反動の連続である。闘争は基本的普遍的な社会過程である。社会生活は個人が特別の闘争に直面することで一部組み立てられている。

要するにスモルの主張は社会過程の一現象として闘争を捉えているが, フランツ・オペンハイマーは社会正義の概念から闘争を捉えている。彼の著書「国家」の中で「社会は正常国家の有機体である。此の国家は社会正義によって組織され, 支配される。闘争している個人又は集団に第三者によって与えられる圧力の中に生ずる一種の正義がある。正義は個人の相互作用によって実際に必要とされる個人の自由の領域の限界を示す。実際に正義は常に個人の自由の限界を示している社会規範からの逸脱は社会的経済的又は政治的要素にもとづいている」と述べている。

又アメリカの日本占領中の司令部に勤務して占領軍の犯罪問題の顧問をしていたジョージ・ブライヤン・ボルドによると, 闘争論の基本仮定は人は集団に関連し, 人の生活は集団連合の生産物である。社会は対立している集団関心と努力の動的力学的均衡の中で結合されている集団の集りであると。

社会過程は直接的力学的に維持されている均衡の中での集団の相互作用から成り立っている。究極結果は集団間の相互作用の中で自己の集団の位置を維持し, 守るための多かれ少かれ連続的努力である。闘争は社会の連続進行が依存する基本的原則的な社会過程の一である。不安定な均衡の中で闘争している集団の力の相対的な安定は社会秩序又は組織である。種々の力の集団関心の常に変っている調整は機能実在としての社会本質である。集団の成員が集団行動を通じて有効に追求されることの出来る共通の関心と共通の欲求を持っているところに集団が形成される。新しい関心が生ずる時に新しい集団が形成されるが, 既存の集団は弱まり減じる。集団関心が重なり合うか, 侵害し合う時に常に集団は競争し合う。集団が相互の領域から締め出されない時に闘争を生ずる。集団はそれ自身を守るために絶えず警戒せねばならぬ。なんとなればその基本的目標の一は転位を防ぐことである。この転位の可能性があらわれるところに国家, 人種, 宗教, 経済団体, 労働組合, あらゆる形の団体間の闘争の危険がある。集団の成員が集団活動に参加することはその個々の人を集団意識させる。集団同化と忠誠は強度の心理学状態すなわち超合理的性質となる。闘争は集団の士気, 又は団体精神を発展して, 最高度まで此の忠誠を強化する。個人は命を捧げるまで忠誠を誓う。例えば戦時中愛国心が非常に高まる。集団の特性の最も理想的なものは集団の闘争の生産物である。そうしてそこに個人は共通の目的に役立つ, 集団闘争の結果は相手の完全破壊, 相手の逃亡, 又は妥協である。概して弱者は圧倒され, 征服され, 従属者の資格で勝者と統合される。

ベジホットからボルドまでの闘争論の発展をたどって見たが, 科学的実証的というより寧ろイデオロギー的な面を強調しがちである。

今まで経過した闘争論の諸説以外にデュルケムのアノミー論から解明するマートンやズインメ

ルの学説を中心としたコーサー等の闘争論があることも見逃がしてはならない。

ズインメルの闘争論を中心としたコーサーは次のように述べている。

当事者間の関係の基礎の矛盾しない闘争と争っている当事者が社会体制の合法性の基礎となる基本的価値を共有している闘争との間の明確な区別をせねばならぬ。闘争論と言えば一般に後者の事である。コーサーは寧ろ前者の分析を中心にしている。関係の合意基礎を分裂する闘争の抑止力は社会構造そのものの中に含まれている。それは闘争の制度化と包容力である。問題があらかじめ解決され得るものとして考えられなくて、問題が起きた時に解決方法の問題又はどんな種類の行為が許容されるかの問題はその時点の力の均衡にもとづくことが闘争当事者の期待の側面である。規範にもとづく制度化された社会関係の代りに、制度化は二者間の闘争の結果にもとづいて解決される争点を許容することにある。すなわち規範は力の均衡の完成にもとづく。闘争は既存の規範を復活させるか、新しい規範を出現させる。社会闘争は新しい状況に適した規範の調整のための機構である。闘争行為は規範の創造と修正を助長することで変化した状況に規範の継続を保証するので柔軟な社会は闘争によって利せられる。力の均衡は社会関係の基本的要素であり、規範構造は従属変数である。現実の社会体制の中に単独の目的に関連した闘争状態は全社会体制が闘争によって分裂される事を必ずしも意味するものでないが、闘争の目的と関係が相互に分離された社会体制がある。このような区別は有効であると思われる。関係が区分されるか又は特殊な目的に関連される社会と関係が特殊なものでなく且拡散した社会とは全く異った問題をもっている。前者のような社会の特別な区分の中における全体闘争があるとしても此の闘争は全社会に必ずしも拡がったり、分裂したりしない。又種々の部分関係は手当たりしだいに相互に関連されないだろう。それらの間に何らかの目的手段の関係があるであろう。そうであるとしたならば目的手段の連鎖を逆行する部分での闘争があるであろう。此の点で階級概念を基本とした闘争論であるタレントルフの理論に関連して特に適切である。タレントルフは階級闘争が分裂又は革命であるかどうかは個々の制度の中での闘争が相互作用するかどうかであると言っている。タレントルフの分析の障害は闘争が一制度から他の制度へ拡がる事を示した社会学的歴史的研究の巨大量に目を閉じたことであろう。

要するに今日の社会は価値合意を中心にして組織された社会体系の代りに多元的価値であり、闘争状況を含んで形成されている社会体系である。かような状況の存在は単一社会でなくて複数社会である。即ち一方で連帯を保ちながら他方では分裂を含んでいる。多くの場合に力の不均衡による従属階級と支配階級との間の闘争である。すなわち従属階級に支配階級の地位の合法性を認めさせようとする事に対してそれを否定しようとする闘争である。従属階級の抵抗の成功の可能性を増す要素の変化の結果によって力の状況が変化する。力の均衡の変化によって協調、改良、革命となる。此の場合には闘争の実行に関連せずに当事者間によって合法的なものとして認められた制度が生れることである。これらの事に関連して現代社会状況を研究するのに有用な研究枠を準備せねばならぬ。その中に基本的闘争状況の分類、闘争集団構造の研究、力の合法性の問題、教育と社会化手段の研究、イデオロギー闘争問題の研究、規範と力の体系との関係の研究

等が含まれる。

#### 参 考 文 献

- John Rex ; Key Problem of Sociological Theory, 1961, London.  
Joe Baily ; Social Theory for Planning, 1973, London.  
Harry, M. Johnson ; Sociology, 1961, London.  
Demerath and Peterson ; System, Change and Conflict, 1967, New York.  
Coser ; The Function of Social Conflict, 1956, Chicago.  
Ralf Dahrendorf ; Class and Class Conflict in Industical Society, 1965, Stanford.  
Don Martindole ; The Nature and Type of Sociological Theory, 1961, London.  
Franz Oppenheimer ; The State, 1928, New York.  
Albion, W. Small ; General Sociology, 1925, Chicago.  
Walter Bagehot ; Physics and Politics, 1948, New York.  
J. D. Y. Peel ; Herbert Spencer, 1971, New York.  
Raymond Aron ; Main Cnrrents in Sociological Thought, 1965, New York.  
Talcott Parsons ; Theories of Society. 1962, Free Press.  
James Alfred Aho ; An Inquiry into the Sources and Political Significance of the Sociology of Conflict, 1975  
London.  
Anthony D. Smith ; The Concept of Social Change, 1973, London.